

六の宮の姫君

芥川龍之介

青空文庫

六の宮の姫君の父は、古い宮腹みやばらの生れだつた。が、時勢にも遅れ勝ちな、昔気質むかしかたぎの人だつたから、官も兵部ひやうぶのたいふ大輔より昇らなかつた。姫君はさう云ふ父母ちちははと一しよに、六の宮のほとりにある、木高こだかい屋形やかたに住まつてゐた。六の宮の姫君と云ふのは、その土地の名前に拠よつたのだつた。

父母は姫君を寵ちようあい愛した。しかしやはり昔風に、進んでは誰にもめあはせなかつた。誰か云ひ寄る人があればと、心待ちに待つばかりだつた。姫君も父母の教へ通り、つつましい朝夕を送つ

てゐた。それは悲しみも知らないと同時に、喜びも知らない生涯だつた。が、世間見ずの姫君は、格別不満も感じなかつた。「父母さへ達者でゐてくれれば好い。」——姫君はさう思つてゐた。

古い池に枝垂しだれた桜は、年毎に乏しい花を開いた。その内に姫君も何時いつの間にか、大人寂おとなさびた美しさを具へ出した。が、頼みに思つた父は、年頃酒を過すごした為に、突然故人になつてしまつた。のみならず母も半年ほどの内に、返らない歎なげきを重ねた揚句、とうとう父の跡を追つて行つた。姫君は悲しいと云ふよりも、途方に暮れずにはゐられなかつた。實際ふところ子の姫君にはたつた一人の乳母うばの外に、たよるものは何もないのだつた。

乳母はけなげにも姫君の為に、骨身を惜まず働き続けた。が、

家に持ち伝へた螺鈿らでんの手筥てばこや白がねの香炉は、何時か一つづつ失はれて行つた。と同時に召使ひの男女も、誰からか暇をとり始めた。姫君にも暮らしの辛い事つらは、だんだんはつきりわかるやうになつた。しかしそれをどうする事も、姫君の力には及ばなかつた。姫君は寂しい屋形の対たいに、やはり昔と少しも変わらず、琴を引いたり歌を詠よんだり、単調な遊びを繰返してゐた。

すると或秋の夕ぐれ、乳母は姫君の前へ出ると、考へ考へこんな事を云つた。

「甥をひの法師の頼みますには、丹波たんばの前司ぜんじにながしの殿が、あなた様に会はせて頂きたいとか申して居るさうでございます。前司はかたちも美しい上、心ばへも善いさうでございますし、前司の父

も受^{ずりやう}領とは申せ、近い^{かんだちめ}上達部の子でもございますから、お会ひになつては如何^{いか}でございませう？ かやうに心細い暮しをなさいますよりも、少しは益^ましかと存じますか。……」

姫君は忍^ねび音に泣き初めた。その男に肌身を任せるのは、不如意な暮しを扶^{たす}ける為に、体を売るのも同様だつた。勿論それも世の中には多いと云ふ事は承知してゐた。が、現在さうなつて見ると、悲しさは又格別だつた。姫君は乳母と向き合つた儘、葛^{くず}の葉を吹き返す風の中に、何時までも袖を顔にしてゐた。……

しかし姫君は何時の間にか、夜毎に男と会ふやうになつた。男は乳母の言葉通りやさしい心の持ち主だつた。顔かたちもさすがにみやびてゐた。その上姫君の美しさに、何も彼も忘れてゐる事は、ほんど殆誰の目にも明らかだつた。姫君も勿論この男に、悪い心は持たなかつた。時には頼もしいと思ふ事もあつた。が、てふとり蝶鳥の几帳きちやうを立てた陰に、燈台の光を眩まぶしがりながら、男と二人むつびあふ時にも、嬉しいとは一夜も思はなかつた。

その内に屋形は少しづつ、花やかな空気を加へ初めた。黒棚や簾すだれも新たになり、召使ひの数も殖ふえたのだつた。乳母は勿論以前よりも、活いき活いきと暮しを取り賄まかなつた。しかし姫君はさう云ふ變化も、寂しさうに見てゐるばかりだつた。

或時雨しぐれの渡つた夜、男は姫君と酒を酌くみながら、丹波の国にあつたと云ふ、気味の悪い話をした。出雲路いづもぢへ下る旅人が大江山の麓に宿を借りた。宿の妻は丁度その夜、無事に女の子を産み落した。すると旅人は生家うぶやの中から、何とも知れぬ大男が、急ぎ足に外へ出て来るのを見た。大男は唯「年は八歳、命めいは自害」と云ひ捨てたなり、忽たちまち何処どこかへ消えてしまつた。旅人はそれから九年目に、今度は京へ上る途中、同じ家に宿つて見た。所が實際女の子は、八つの年に変死してゐた。しかも木から落ちた拍子に、鎌を喉のどへ突き立ててゐた。——話は大体かう云ふのだつた。姫君はそれを聞いた時に、宿命のせんなさに脅おびされた。その女の子に比べれば、この男を頼みに暮してゐるのは、まだしも仕合せに違ひ

なかつた。「なりゆきに任せる外はない。」——姫君はさう思ひながら、顔だけはあでやかにほほ笑んでゐた。

屋形の軒に当つた松は、何度も雪に枝を折られた。姫君は昼は昔のやうに、琴を引いたり双六すしごくを打つたりした。夜は男と一つ褥しとねに、水鳥の池に下りる音を聞いた。それは悲しみも少いと同時に、喜びも少い朝夕だつた。が、姫君は不相変あひかわらず、この懶い安らかさの中に、はかない満足を見出してゐた。

しかしその安らかさも、思ひの外急ほかに尽きる時が来た。やつと春の返つた或夜、男は姫君と二人になると、「そなたに会ふのも今宵こよひぎりぢや」と、云ひ悪にくくさうに口を切つた。男の父は今度の除目ぢもくに、陸奥むつの守かみに任ぜられた。男もその為に雪の深い奥へ、一

しよに下らねばならなかつた。勿論姫君と別れるのは、何よりも男には悲しかつた。が、姫君を妻にしたのは、父にも隠してゐたのだから、今更打ち明ける事は出来できにく悪かつた。男はため息をつきながら、長々とさう云ふ事情を話した。

「しかし五年たてば任にんはて終ぢや。その時を楽しみに待つてたもれ。」

姫君はもう泣き伏してゐた。たとひ恋しいとは思はぬまでも、頼みにした男と別れるのは、言葉には尽せない悲しさだつた。男は姫君の背を撫でては、いろいろ慰めたり励ましたりした。が、これも二言目には、涙に声を曇らせるのだつた。

其処へ何も知らない乳母は、年の若い女房たちと、銚てうし子や高たかつ

坏きを運んで来た。古い池に枝垂しだれた桜も、蕾つぼみを持つた事を話しながら。……

三

六年目の春は返つて来た。が、奥へ下つた男は、遂に都へは帰らなかつた。その間に召使ひは一人も残らず、ちりぢりに何処かへ立ち退のいてしまふし、姫君の住んでゐた東の対たいも或年の大風たいに倒れてしまつた。姫君はそれ以来乳母と一しよさむらひそどのすまひに侍の廊を住居すまひにしてゐた。其処は住居と云ふものの、手狭でもあれば住み荒してもあり、僅あめつゆに雨露しの凌しのげるだけだつた。乳母はこの廊ほそどのへ移つた

当座、いたはしい姫君の姿を見ると、涙を落さずにはゐられなかつた。が、又或時は理由もないのに、腹ばかり立ててゐる事があつた。

暮しのつらいのは勿論だつた。棚の厨子づしはとうの昔、米や青菜に變つてゐた。今では姫君の袿うちぎや袴はかまも身についてゐる外は残らなかつた。乳母は焚たき物に事を欠けば、立ち腐れになつた寝殿しんでんへ、板を剥はぎに出かける位だつた。しかし姫君は昔の通り、琴や歌に氣を晴らしながら、ちつと男を待ち続けてゐた。

するとその年の秋の月夜、乳母は姫君の前へ出ると、考へ考へこんな事を云つた。

「殿はもう御帰りにはなりますまい。あなた様も殿の事は、お忘

れになつては如何いかにでございませう。就てはこの頃或てんやくのすけ典藥之助が、あなた様にお会はせ申せと、責め立てて居るのでございませうが、

……」

姫君はその話を聞きながら、六年以前まへの事を思ひ出した。六年以前には、いくら泣いても、泣き足りない程悲しかった。が、今は体も心も余りにそれには疲れてゐた。「唯静かに老い朽ちたい。」……その外は何も考へなかつた。姫君は話を聞き終ると、白い月を眺めたなり、ものうげ懶げにやつれた顔を振つた。

「わたしはもう何も入いらぬ。生きようとも死なうとも一つ事ぢや。

……」

*

*

*

丁度これと同じ時刻、男は遠い常陸ひたちの国の屋形に、新しい妻と酒を斟くんでゐた。妻は父の目がねにかなつた、この国の守かみの娘だつた。

「あの音は何ぢや？」

男はふと驚いたやうに、静かな月明りの軒を見上げた。その時なぜか男の胸には、はつきり姫君の姿が浮んでゐた。

「栗の実が落ちたのでございませう。」

常陸の妻はさう答へながら、ふつつかに銚子の酒をさした。

四

男が京へ歸つたのは、丁度九年目の晩秋だつた。男と常陸の妻の族うからと、——彼等は京へはひる途中、日がらの悪いのを避ける為に、三四日粟津あはづに滞在した。それから京へはひる時も、昼の目目に立たないやうに、わざと日の暮を選ぶ事にした。男は鄙ひなにゐる間も、二三度京の妻のもとへ、懇ねんろな消息をことづけてやつた。が、使が歸らなかつたり、幸ひ歸つて来たと思へば、姫君の屋形がわからなかつたり、一度も返事は手に入らなかつた。それだけに京へはひつたとすると、恋しさも亦ひとしほ一層ひとしほだつた。男は妻の父の屋形へ無事に妻を送りこむが早いかな、旅仕度も解かずに六の宮へ行つた。

六の宮へ行つて見ると、昔あつた四よつ足の門も、檜皮葺ひはだぶきの寝

殿や対たいも、悉ことごとく今はなくなつてゐた。その中に唯残つてゐるのは、崩れ残りの築土ついでちだけだつた。男は草の中に佇たたずんだ儘、茫然と庭の跡を眺めまはした。其処には半ば埋もれた池に、水葱なぎが少し作つてあつた。水葱はかすかな新月の光に、ひつそりと葉を簇むららせてゐた。

男は政まんどころ所おほと覺しいあたりに、傾いた板屋のあるのを見つけた。板屋の中には近寄つて見ると、誰か人影もあるらしかつた。男は闇を透すかしながら、そつとその人影に声をかけた。すると月明りによろぼひ出たのは、何処か見覚えのある老尼だつた。

尼は男に名のられると、何も云はずに泣き続けた。その後やつと途切れ途切れに、姫君の身の上を話し出した。

「御見忘れでもございませうが、手前は御内みうちに仕へて居つた、はした女めの母でございます。殿がお下りになつてからも、娘はまだ五年ばかり、御奉公致して居りました。が、その内に夫と共々、たしま但馬へ下る事になりましたから、手前もその節娘と一しよに、御お暇いとまを頂いたのでございます。所がこの頃姫君の事が、何かと心にかかりますので、手前一人京へ上つて見ますと、御覽の通り御屋形も何もなくなつて居るのでございせんか？ 姫君も何処へいらつしやつた事やら、——実は手前もさき頃から、途方に暮れて居るのでございます。殿は御存知もございますまいが、娘が御奉公申して居つた間も、姫君のお暮しのおいたはしきは、申しやうもない位でございました。……」

男は一部始終を聞いた後、この腰の曲つた尼に、下の衣を一枚脱いで渡した。それから頭を垂れた儘、黙然と草の中を歩み去つた。

五

男は翌日から姫君を探しに、らくちゆう洛中を方々歩きまはつた。が、何処へどうしたのか、容易に行き方ゆがたはわからなかつた。

すると何日か後の夕ぐれ、男はむら雨さめを避ける為に、朱雀門すざくもんの前にある、西の曲きよくでん殿の軒下に立つた。其処にはまだ男の外にも、物乞ひらしい法師が一人、やはり雨止みを待ちわびてゐた。

雨は丹塗^{にぬ}りの門の空に、寂しい音を立て続けた。男は法師を尻目にしながら、苛^{いらだ}立たしい思ひを紛^{まぎ}らせたさに、あちこち石畳みを歩いてゐた。その内にふと男の耳は、薄暗い窓の櫺^{れんじ}子の中に、人のあるらしいけはひを捉へた。男は殆^{ほとんど}何の気なしに、ちらりと窓を覗いて見た。

窓の中には尼が一人、破れた筵^{むしろ}をまとひながら、病人らしい女を介抱してゐた。女は夕ぐれの薄明りにも、無気味な程^や瘦^やせ枯^がれてゐるらしかった。しかしその姫君に違ひない事は、一目見ただけでも十分だつた。男は声をかけようとした。が、浅ましい姫君の姿を見ると、なぜかその声が出せなかつた。姫君は男のゐるのも知らず、破れ筵の上に寝反りを打つと、苦しさうにこんな歌を

詠よんだ。

「たまぐらのすきまの風もさむかりき、身はならはしのものにざりける。」

男はこの声を聞いた時、思はず姫君の名前を呼んだ。姫君はさすがに枕を起した。が、男を見るが早いか、何かかすかに叫んだきり、又筵の上に俯伏うつぶしてしまった。尼は、——あの忠実な乳母は、其処へ飛びこんだ男と一しよに、慌あわてて姫君を抱き起した。しかし抱き起した顔を見ると、乳母は勿論男さへも、一層慌あわてずにはゐられなかつた。

乳母はまるで氣の狂つたやうに、乞食法師のもとへ走り寄つた。さうして、臨終の姫君の為に、何なりとも経を読んでくれと云つ

た。法師は乳母の望み通り、姫君の枕もとへ座を占めた。が、經文を讀誦どくじゆする代りに、姫君へかう言葉をかけた。

「往生は人手に出来るものではござらぬ。唯御自身怠らずに、阿弥陀仏の御名みなをお唱へなされ。」

姫君は男に抱かれた儘、細ぼそとぶつみやう仏名を唱へ出した。と思ふと恐しさうに、ぢつと門の天井を見つめた。

「あれ、あそこに火の燃える車が……」

「そのやうな物にお恐れなさるな。御みほとけ仏さへ念ずればよろしう

ござる。」

法師はやや声を励ました。すると姫君は少しばらく時の後、又夢うつつのやうに眩つぶやき出した。

「金色こんじきの蓮華れんげが見えます。天蓋てんがいのやうに大きい蓮華が。：

：

法師は何か云はうとしたが、今度はそれよりもさきに、姫君が切れ切れに口を開いた。

「蓮華はもう見えませぬ。跡には唯暗い中に風ばかり吹いて居りまする。」

「一心に仏名を御唱へなされ。なぜ一心に御唱へなさらぬ？」

法師は殆ど叱るやうに云つた。が、姫君は絶え入りさうに、同じ事を繰り返すばかりだつた。

「何も、——何も見えませぬ。暗い中に風ばかり、——冷たい風ばかり吹いて参りまする。」

男や乳母は涙を呑みながら、口の内に弥陀を念じ続けた。法師も勿論合掌した儘、姫君の念仏を扶けてゐた。さう云ふ声の雨に交る中に、破れ筵を敷いた姫君は、だんだん死に顔に變つて行つた。……

六

それから何日か後の月夜、姫君に念仏を勧めた法師は、やはり朱雀門の前の曲殿に、破れ衣の膝を抱へてゐた。すると其処へ侍が一人、悠々と何か歌ひながら、月明りの大路を歩いて来た。侍は法師の姿を見ると、草履の足を止めたなり、さりげないやうに

声をかけた。

「この頃この朱雀門のほとりに、女の泣き声ができるさうではないか？」

法師は石畳みに蹲うづくまつた儘、たつた一言返事をした。

「お聞きなされ。」

侍はちよつと耳を澄ませた。が、かすかな虫の音の外は、何一つ聞えるものもなかつた。あたりには唯松の匂が、夜気に漂つてゐるだけだつた。侍は口を動かさうとした。しかしまだ何も云はない内に、突然何処からか女の声が、細そぼそと歎きを送つて来た。

侍は太刀に手をかけた。が、声は曲殿の空に、一しきり長い尾

を引いた後、だんだん又何処かへ消えて行つた。

「御仏を念じておやりなされ。——」

法師は月光に顔を擡もたげた。

「あれは極楽も地獄も知らぬ、腑ふ甲が斐ひない女の魂でござる。御仏を念じておやりなされ。」

しかし侍は返事もせず、法師の顔を覗きこんだ。と思ふと驚いたやうに、その前へいきなり両手をついた。

「内記ないきの上しやうにん人ではございませんか？ どうして又このやうな

所に——」

在俗の名は慶よししげ滋やすたねの保胤、世に内記の上人と云ふのは、空也くうや

上人の弟子の中にも、やん事ない高德の沙門しゃもんだつた。

(大正十一年七月)

青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系 ㊦ 芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

入力：j.utiyama

校正：林めぐみ

1998年12月2日公開

2004年3月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

六の宮の姫君

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>